

平成6年度県営農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告書

員弁郡大安町	石佛東遺跡
鈴鹿市中富田町	下代遺跡
鈴鹿市小田町	天水遺跡
安芸郡美里村	大洞遺跡・風呂ノ谷遺跡・細野遺跡
一志郡嬉野町	釜生田遺跡
多気郡勢和村	松葉遺跡

1995年3月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、平成6年度三重県農業基盤整備事業地内における事前の緊急発掘調査のうち、下記7遺跡の調査結果をまとめ、合冊本にしたものである。
員弁郡大安町 石佛東遺跡
鈴鹿市中高田町 下代遺跡
鈴鹿市小田町 天水遺跡
安芸郡美里村 大洞遺跡・風呂ノ谷遺跡・細野遺跡
一志郡嬉野町 釜生田遺跡
多気郡勢和村 松葉遺跡
2. 当該調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を受けて三重県教育委員会が、他は三重県農林水産部と地元市町村が負担した。
3. 当該調査及び室内整理の体制は下記の通りである。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課（調査第一係）
整理担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課及び管理指導課
4. 調査に際し、三重県農林水産部農地整備課、及び関係事務所、関係土地改良区等地元の方々、大安町・鈴鹿市・美里村・嬉野町・勢和村教育委員会等の関係諸機関・各位にご協力を戴いた。
5. 本書で用いた遺構表示記号は下記のとおりである。
SB：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝 SE：井戸 SX：墓
Pit：柱穴 SZ：不明遺構
6. 本書で報告した発掘調査記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
7. スキャンニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	1
II 石佛東遺跡（船越承信）	2
III 下代遺跡（竹田憲治・田中伸之）	5
IV 天水遺跡（竹田憲治）	11
V 大洞遺跡 風呂ノ谷遺跡 細野遺跡（河北秀実）	13
VI 釜生田遺跡（泉雄二）	17
VII 松葉遺跡（河北秀実）	22

図 版 目 次

II 石佛東遺跡		
第1図	遺跡位置図	2
第2図	調査区平面図	3
第3図	SK1・2遺構実測図	4
III 下代遺跡		
第1図	遺跡位置図	6
第2図	遺跡地形図	6
第3図	調査区位置図	7
第4図	遺構平面図	8
第5図	出土遺物実測図	7
IV 天水遺跡		
第1図	遺跡位置図	11
第2図	遺跡地形図	12
第3図	調査区位置図	12
第4図	出土遺物実測図	12
V 大洞遺跡 風呂ノ谷遺跡 細野遺跡		
第1図	遺跡位置図	13
第2図	遺跡地形図	14
第3図	大洞遺跡・風呂ノ谷遺跡平面図、大洞遺跡・風呂ノ谷遺跡遺物実測図	15
第4図	細野遺跡平面図、中世墓SX8実測図、細野遺跡遺物実測図	16
VI 釜生田遺跡		
第1図	遺跡位置図	18
第2図	調査区位置図	19
第3図	遺構平面図	20
第4図	出土遺物実測図	21
VII 松葉遺跡		
第1図	遺跡位置図	23
第2図	調査区位置図	23
第3図	A地区土層断面図、遺構平面図、試掘調査及びA地区遺物実測図 B地区土層断面図、遺構平面図	24
第4図	C地区土層断面図、遺構平面図、遺物実測図	25
第5図	SK1遺物出土状況図、遺物実測図	26
第6図	D地区土層断面図、遺構平面図、遺物実測図	27

表 目 次

I	前文	
	第1表 平成6年度本調査・立会い調査遺跡一覧	1
III	下代遺跡	
	第1表 出土遺物観察表	9

写 真 目 次

II	石佛東遺跡	
	PL1 調査区全景（東から）、SK2断面（南から）	
V	大洞遺跡 風呂ノ谷遺跡 細野遺跡	
	PL2 大洞遺跡C地区（東から）、風呂ノ谷遺跡A地区（東から）	
	PL3 風呂ノ谷遺跡B地区（西から）、風呂ノ谷遺跡C地区（北から）	
	PL4 細野遺跡B地区（北東から）、細野遺跡SX8（南から）	
VI	釜生田遺跡 釜生田遺跡	
	PL5 調査区全景（東から）、調査区中央部（南東から）	
	PL6 調査区東半分（南西から）、自然流路付近（南から）	
VII	松葉遺跡 松葉遺跡 松葉遺跡	
	PL7 松葉遺跡遠景（北から）、A地区（東から）	
	PL8 B地区（西から）、C地区（南から）	
	PL9 C地区 SK1（西から）、D地区（北から）	

I. 前 言

埋蔵文化財の保護にとつて問題となる各種の開発事業の中でも、県営の圃場整備事業はその対象となる面積規模が広く、このために事業地域内に所在して取り扱ひにかかる調整・協議を要することとなる埋蔵文化財の件数や規模も多く、大規模になりがちである。

さらに、事業の実施形態のうえでも夏期の作付けと冬期の工事施工時期との狭間で分布調査、事前の範囲確認調査と設計協議を経て、限られた発掘調査期間の設定など多くの課題を抱えながらの実施となりがちである。また、農林関係事業には県営圃場整備事業のほか畜産環境整備、広域農道整備など様々な事業が県内各地で行われている。

平成6年度についても例年に違わず、前年度末からの分布調査、散布地等を対象とした試掘調査の結果を基に再三の協議を経たうえで、現状保存の困難な部分について記録保存のための発掘調査を実施しており、本年度の農業基盤整備事業に関連する発掘調査は試掘調査等を含めて66件に及ぶ。その地域も県域北部の員弁郡から伊賀地域、中勢地域のほか

南勢地域の度会郡にわたっている。

その内、本調査は15遺跡、延べ21,980㎡(久居市教育委員会の実施による尺ヶ寺遺跡の410㎡を含む)のほか、8遺跡4,146㎡については立会い調査を実施している。その他広域農道建設にかかる峯城跡(亀山市川崎町柴崎)については地形測量(業者委託)を実施した。

この間、現地調査と工事工程との調整などの条件が可能であった2遺跡については、発掘調査成果の報告と一般住民の方々への公開を目的として、現地説明会を実施した。このうち平成6年8月13日に実施した、多気郡明和町養村の北野遺跡では、あいにくの雨天にもかかわらず約30名の熱心な参加者を得た。一方、那賀郡青山町伊勢路に所在する高寺遺跡の現地説明会は10月23日に開催し、約80名の方々に参加していただくことができた。

このようにして、大型連休直後の5月9日から開始した平成6年度の農林事業にかかる発掘調査も、年を越えた平成7年1月末にようやく現地調査を終了することができた。

No.	事業種別	区分	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)
1	県営圃場整備	本調査	下代遺跡	鈴鹿市中富田町字下代	200
2	"	"	大洞遺跡	安芸郡美里村北長野字大洞	560
3	"	"	鳳呂ノ谷遺跡	安芸郡美里村北長野字鳳呂ノ谷	580
4	"	"	細野遺跡	安芸郡美里村北長野字細野	850
5	"	"	釜生田遺跡	一志郡織野町釜生田字坊川原	2,500
6	"	"	尺ヶ寺遺跡	久居市神原町字尺ヶ寺	410
7	"	"	北野遺跡	多気郡明和町養村字西へべら	2,540
8	"	"	井戸地遺跡	上野市土橋字井戸地	1,200
9	"	"	高寺遺跡	名賀郡青山町伊勢路字高寺	1,350
10	"	"	六地藏B遺跡	名賀郡青山町伊勢路字六地藏	1,340
11	県営農村総合環境整備	"	石佛東遺跡	員弁郡大安町南金井字石佛東	750
12	県営畜産経営環境整備	"	松葉遺跡	多気郡明和町波多瀬字松葉	1,200
13	開拓地整備事業	"	長者屋敷遺跡	鈴鹿市広瀬町字仲土居ほか	2,700
14	農免道路建設事業	"	森脇遺跡	上野市市部字森脇	1,500
15	広域農道建設事業	"	遊山遺跡	阿山郡伊賀町愛田字遊山	4,300
16	県営圃場整備	立会い調査	玉垣内遺跡	員弁郡藤原町山口字玉垣内	240
17	"	"	天水遺跡	鈴鹿市小田町字天水	400
18	"	"	菅生遺跡	松阪市菅生町字北浦	31
19	"	"	飛中遺跡	松阪市菅生町字飛中・焼俣	65
20	"	"	中村遺跡	度会郡度会町田口字中村	680
21	"	"	沖ノ下遺跡	"	270
22	"	"	西出遺跡	上野市山神字西出	850

第1表 平成6年度 本調査・立会い調査遺跡一覧

Ⅱ. 員弁郡大安町 石佛東遺跡

1. 位置と歴史的環境

石佛東遺跡(1)は、養父川と牛ヶ谷川に挟まれた台地上にあり、行政上は員弁郡大安町南金井字石佛東に位置する。遺跡の南西には「石佛」の小字名があることから、この付近が中世以降に墓地として利用されていた可能性が考えられる。

当遺跡の周辺には、石樽下経塚(2)・経塚中世墓群(5)・細瀬古中世墓(3)・正法寺中世墓(4)・三重郡菟野町杉谷中世墓などの中世墓があり、五輪塔や蔵骨器、石仏などが確認されている。

経塚中世墓群では、瀬戸四耳壺や常滑壺などを蔵骨器とした中世墓が約20基検出されており^①、杉谷中世墓では五輪塔や宝篋印塔などが群在すると

ともに多数の蔵骨器^②が出土している。

また、菟野町山之東遺跡では焼土壁を持つ中世の土壇墓が確認されている^③。

主な中世の遺跡には、大久保城跡(6)・大井田城跡(7)・野田丸城跡(8)・梅戸城跡(9)・丹生川上城跡(10)・石樽下遺跡(11)・野添遺跡(12)・丹生川中遺跡(13)・松の木遺跡(14)・下街途遺跡(15)・北野郷遺跡(16)・真光寺遺跡(17)・大垣内遺跡(18)がある。

丹生川上城跡では郭の内部や周辺で9基の中世墓が確認され、内1基は納骨施設とされている^④。真光寺遺跡は、細瀬古中世墓の北側に位置し、五輪塔が採集されている^⑤。



第1図 遺跡位置図(1:50,000) 国土地理院「狼野」より

2. 遺構と遺物

検出された遺構は、土坑2基と溝が1条である。

SK1 調査区中央付近で検出された長径70cm×短径60cm、深さは5cm程度の楕円形土坑である。埋土には炭や灰が多く認められたが、焼土や骨片などの遺物は出土しなかった。

SK2 調査区の西側で検出された長辺1m×短辺0.7m、深さは20cmの長方形の土坑である。焼土壁を有し、埋土には炭が多く含まれていたことから中世墓の可能性が考えられたが、骨片などの遺物は出土しなかった。

焼土は南壁と西壁の一部で認められたのみで、底面には全く及んでいなかった。

SD3 調査区中央をほぼ南北にはしる幅1m、深さ50cmの溝で、遺構面に対してほぼ垂直に掘り

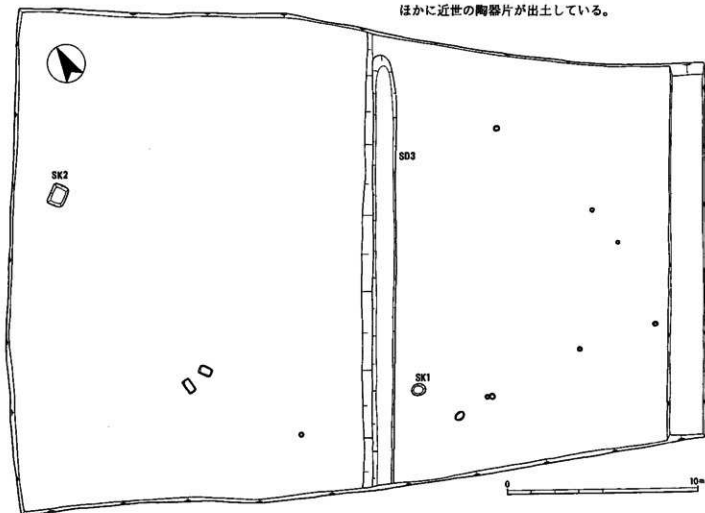
込まれている。埋土は、上から耕作土(褐灰色土)、褐灰色土(地山がブロックで混入)、暗褐灰色土(耕作土に類似)、地山(赤褐色土)の順である。
出土遺物 溝の上層からは煙硝播の口縁部片、笠原鉢の体部片、徳利の底部(3)が出土した。

煙硝播は口縁端部が折り返され、玉縁状になっており、口縁内面から外面にかけて鉄釉が施されている。瀬戸美濃産で17世紀後半のものである。

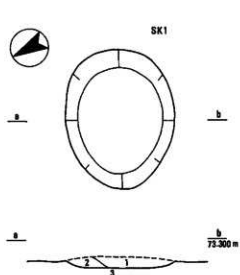
笠原鉢は内外面に緑銅釉が施されており、内面には鉄絵がみられる。美濃産で17世紀後半のものであろう。

徳利は削りだし高台で一部に灰釉が認められ、底部にはトチンの跡がみられる。美濃産で18世紀後半のものである。

ほかに近世の陶器片が出土している。



第2図 調査区平面図 (1:200)

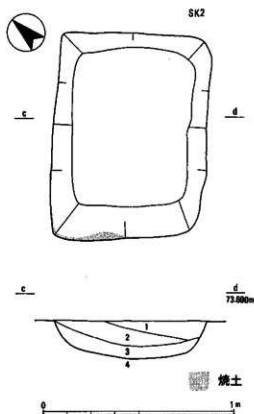


SK1

- 1 炭灰層
- 2 灰混じり暗褐色土
- 3 赤褐色土(地山)

SK2

- 1 黄褐色土
- 2 炭混じり暗褐色土
- 3 黒褐色土(炭層)
- 4 赤褐色土(地山)



第3図 SK1・2遺構実測図(1:20)

3. 小 結

今回の調査で検出されたSK2は、炭層と焼土壁を有することから現地で墓墳を掘り、火葬した後に土盛りをした中世墓の可能性が考えられた。

このような焼土壁を有する土墳墓は、松阪市横尾墳墓群^④や三重郡菟野町山之東遺跡^⑤で検出された土墳墓に類例がみられ、墓墳内に多量の炭や骨片などが認められている。しかし、SK2では埋土に多量

の炭が含まれていたものの骨片は全く出土しなかったことから中世墓とは断定しがたい。

SK1は、非常に浅く、炭と灰があるのみで、墓墳とは考えにくい。

SD3は、江戸時代以降のものと思われるが、性格は不明である。

(船越重伸)

[註]

- ① 『三重県埋蔵文化財年報 昭和45年度』 三重県教育委員会 1974.
- ② 『三重の中世墓』 三重県埋蔵文化財センター 1992.6
- ③ 『平成元年度鳥取県基礎調査事業地域文化財発掘調査報告一第1分冊一』 三重県埋蔵文化財センター 1990.3.
- ④ 『丹生川上城跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1965.3
- ⑤ 『真光寺跡研究報告 その2』 『歴史館』3号 1950.
- ⑥ 『近畿自動車道(久居～物産間)埋蔵文化財発掘調査報告2』 三重県教育委員会 1986.3
- ⑦ 資料3に同

Ⅲ. 鈴鹿市中富田町 下代遺跡

1. はじめに

下代遺跡の所在する鈴鹿市中富田町の水田・畑地がほ場整備されることになり、県埋蔵文化財センターでは文化財の有無を確認するため平成3年冬季に分布調査を行い、約 29,000 m²の部分で遺物の散布が確認された。

そこで平成3年2月に試掘調査を行い、試掘坑 15・16・17・18・20・21 から直径 30 cm前後の小穴等が検出された。また、試掘坑 9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23 には遺物包含層がみられ、18,700 m²にわたり遺跡が広がることが判明した。(第 図)

県埋蔵文化財センターではこの結果をもとに県農

林水産部と遺跡保存について協議を重ね、現状保存が困難な排水溝部分について発掘調査を行うことになった。

発掘調査は平成6年10月18日から開始した。調査面積は 600 m²の予定であったが、調査区東側では検出面までの深さが 180 cm 以上になり、隣接する JR 関西本線の軌道に影響が及ぶおそれが生じた。そこで面的な調査は調査区西端から 70m まで (A 区) で打ち切り、それより東側は層位や遺構の有無を確認するための点的な調査 (B~H 区) を行い、合計 200 m²を調査して、同年 10 月 26 日に現地調査を終了した。(竹田憲治)

2. 位置と環境

鈴鹿山脈にその源を発している鈴鹿川は、洪積台地を開折して東流し伊勢湾に流れ込む。そして、中流域ではその開折作用により数段の河岸段丘を形成している。下代遺跡(1)は、鈴鹿川とその支流安楽川との合流点付近に位置し、鈴鹿川左岸の河岸段丘上に立地している。以下、当遺跡の周囲に分布している遺跡を中心に弥生時代から歴史時代にかけて概観する。

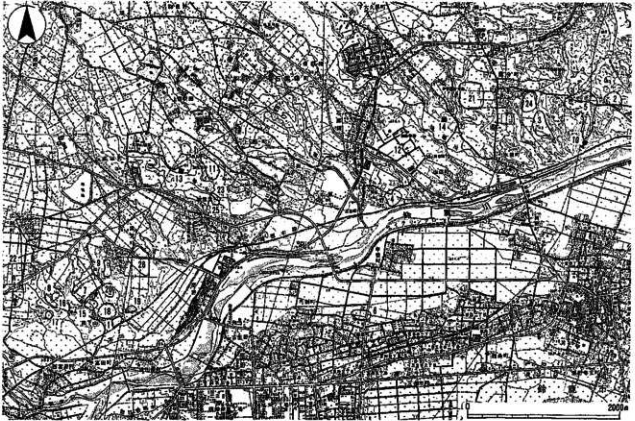
弥生時代前期の遺跡は、旧河川の自然堤防上に分布しており過去5次に渡って発掘調査が行われ、前期から後期までの遺物が出土した上突田町の上突田遺跡^①、前期の土器が出土した南長太町の天ノ宮遺跡、林崎町他の大木ノ輪遺跡がある。

これらの遺跡に対し、弥生時代中期から後期にかけての遺跡は鈴鹿川流域の段丘上にも広く分布するようになる。竪穴住居、方形周溝墓が調査により明らかになった扇広遺跡^②や竪穴住居や方形周溝墓が確認された中尾山遺跡^③がある。これらの遺跡では密集した竪穴住居跡が検出されている。

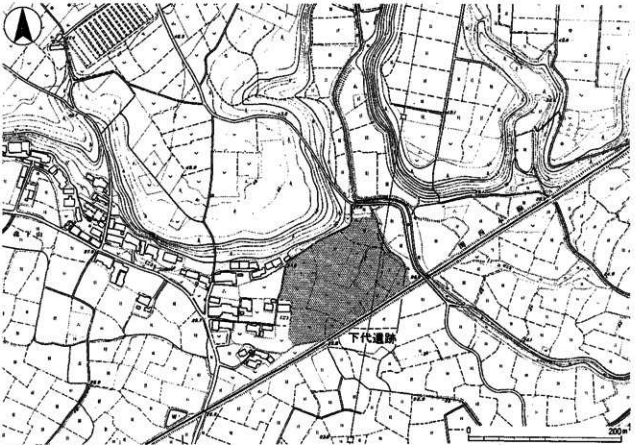
また、国分町の東ノ岡遺跡では菱環組式銅鐸片が、一反通遺跡^④では突線組式の銅鐸片が出土し、寺山遺跡^⑤ 岡田遺跡^⑥でも弥生時代中期から後期に至る土器が出土している。

当遺跡の近辺になると、発掘調査があまりおこなわれておらず詳細は不明であるが、弥生土器の散布が認められる北織越遺跡^⑦ 茶臼塚遺跡^⑧ 津賀遺跡^⑨がある^⑩。こういった鈴鹿川流域の恵まれた自然環境から獲得した地域集団の経済力がやがてまとまった古墳文化の形成地へと発展していく。

主な古墳としては^⑪、安楽川とそれに注ぐ御弊川との合流点に位置する亀山市田村町の能妻野王塚古墳や鈴鹿川と内部川にはさまれた標高 20~60mの洪積台地上に立地する寺田山1号墳(10)、径 78m、高さ 13mの2段構成で全面に葺石があり、横穴式石室が確認されている白鳥塚1号墳(11)、箱式石棺や面文帯神獣鏡が出土した亀山市みどり町の井田川茶臼山古墳などがある^⑫。また、平成5年度より発掘調査が行われている石薬師東古墳群(12)は、方墳の



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) (国土地理院 1 : 25,000「鈴鹿から」)



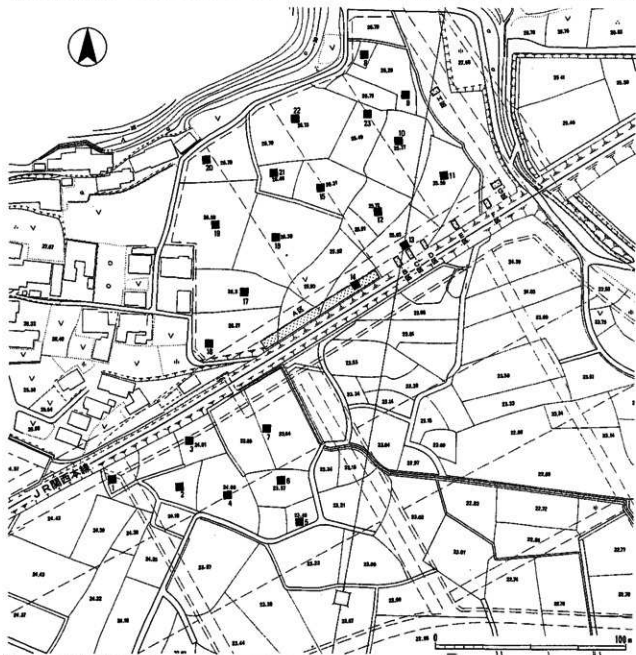
第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

群集墳として注目されている^⑩。古墳時代後期になると無文銀鏡も出土した北野古墳^⑬(13)や蛸田古墳(14)などがある。下代遺跡付近には、森下山古墳群(15)、茶臼塚古墳群(16)、権現ノ下古墳群(17)、蟻越古墳群(18)、厩敷古墳群(19)、津賀古墳群(20)といった群集墳が点在している^⑪。これらは、当遺跡の北側及び南側の丘陵の最高部に立地し、沖積平野をその下に望む恵まれた立地条件を有している。

奈良時代になると、伊勢国分寺跡(21)、伊勢国府跡と推定される長者屋敷遺跡(22)があり、この地域は伊勢国の政治の中心のひとつになっていった。ま

た、伊勢国分寺跡と長者屋敷遺跡の中間に立地している川原井瓦窯跡^⑫(23)は、国分寺に瓦を供給していたと考えられる。

平安時代では、三重県埋蔵文化財文化財センターの今年度の調査で掘立柱建物が検出されている国分東遺跡^⑬(24)や、川原井遺跡^⑭(25)がある。また、津賀平遺跡(26)では、掘立柱建物が検出され、八咫鏡が出土している^⑮。また、安楽川と鈴鹿川との合流点の左岸、西富田町から庄野町にかけては、連続した条里地割があり、当遺跡南側の水田地帯においても条里の地割が確認できる^⑯。(田中 伸之)



第3図 調査区位置図 (1:2,000) 調査区、調査標坑

3. 遺構と遺物

(1) A区

基本的層序は、第1層：褐色砂質土（耕作土）、第2層：灰褐色砂質土（床土）、第3層：明褐色砂質土、第4層：黒褐色土（遺物包含層）、第5層：礫混黄褐色粘質土（地山）となっている。ただし西端から20mほどから地山が礫混黄褐色砂となり、東端までこの状況が続く。地山までの深さは調査区西端で1.1m、東端で1.6mであり、地山は北西から南東にむけて傾斜している。

西端から約20mにかけて直径30cm前後、深さ30cm前後の小穴等を検出したが、時期や建物としてまとまるかどうかは不明である。

出土した主な遺物は、弥生時代中期から後期の壺（1～2）・甕（3）・高杯（6）・器台（4・5）、古墳時代前期の土師器高杯、古墳時代後期の土師器椀・甕・須恵器杯身（7）・鉄鏃（13）、奈良時代の長頸壺（10）である。すべて黒褐色土（遺物包含層）

から出土している。

(2) B～E区

層序はA区と同一である。地山までの深さは、B区で1.90m、C区で1.80m、D区で1.70m、E区で1.30mである。また地山は、北から南にむけて傾斜している。調査中かなりの湧水がみられた。

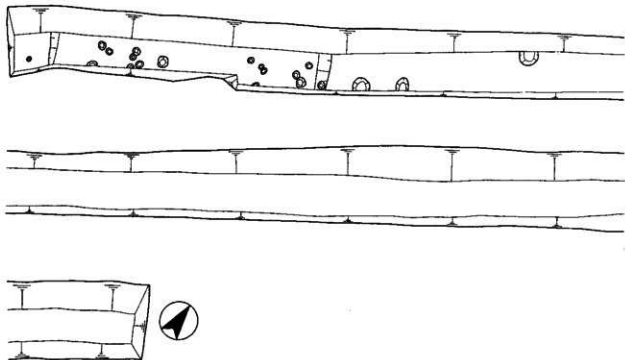
遺構は検出されなかったが、B区で弥生時代中期の壺（8～9）、D区とE区で平安時代末から鎌倉時代初期にかけての山茶碗（11・12）が出土した。

(3) F～H区

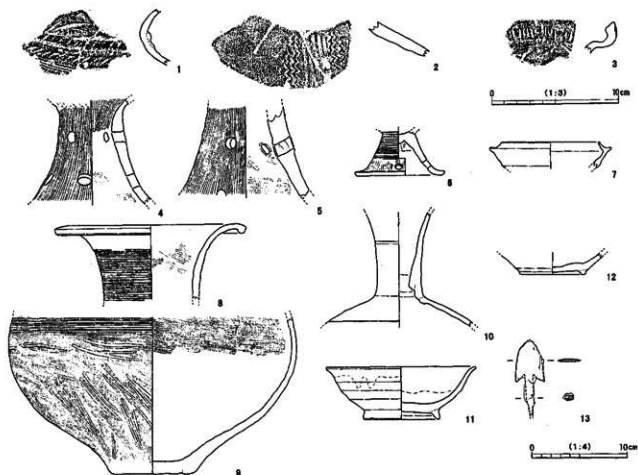
層序は第1層：褐色砂質土（耕作土）、第2層：黄褐色礫混砂（地山）である。地山までの深さは、F区で0.5m、G区で0.3m、H区で0.4mである。調査中に、かなりの湧水がみられた。

遺構・遺物ともみられなかった。

（田中伸之、竹田憲治）



第4図 遺構平面図（1：200）



第5図 出土遺物実測図 (1~3は1:3、4~13は1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置			調査技法・文様など	胎土	焼成	色調	残存	備考	
			通	層	口徑・高さ・その他							
1	001-02	弥生土器 蓋 腹部	A区	包倉層	—	—	外置 幾番・刺突文・横線文	1~3mm 砂粒多い	並	外置にぶい黄褐色 内面褐色	腹部 一部	
2	001-03	弥生土器 蓋 腹部	A区	包倉層	—	—	外置 縦方向の櫛櫛文・波状文	1~3mm 砂粒多い	並	にぶい黄褐色	腹部 一部	
3	001-01	弥生土器 蓋 口縁部	A区	包倉層	—	—	外置 棒状浮文・刺目文	1~2mm 砂粒多い	並	褐色	口縁部 一部	
4	003-03	弥生土器 舞台 脚部	A区	包倉層	—	—	外置 肋斗 内面 上部肋斗、下部ハケ後斗	1~2mm 砂粒僅か	良	灰白色	脚部円周 1/3	
5	004-04	弥生土器 舞台 脚部	A区	包倉層	—	—	外置 ハケ 内面 上部肋斗、下部ハケ	密	良	明赤褐色	脚部円周 1/4	
6	001-01	弥生土器 高杯 脚部	A区	包倉層	—	—	底部 底 外置 ハケ後横方向櫛目 内面 オケ斗、斗	1~3mm 砂粒僅か	良	淡褐色	脚部 1/3	
7	002-02	須惠器 杯身 口縁部	A区	包倉層	10.0	—	外置 口斗斗 内面 口斗斗	密	良	灰色	口縁部 1/3	
8	004-04	弥生土器 蓋 口縁部	C区	包倉層	19.8	—	外置 斗斗斗 内面 ハケ後斗	3mm以下 砂粒	並	並にぶい褐色	腹部 1/2	
9	002-01	弥生土器 蓋 底部	C区	包倉層	—	—	底部 底 外置 櫛櫛横線文・ハケ後斗斗 内面 ハケ	5mm以下 砂粒多い	並	褐色にぶい赤褐色、 外面上部 暗赤灰色	底部 完存	
10	005-01	須惠器 長頸壺 腹部	A区	包倉層	—	—	外置 斗斗斗、腹部ハケ斗 内面 斗斗斗、オケ斗	1~2mm 砂粒	良	灰白色	腹部 完存	
11	008-05	陶器 山茶桶	D区	包倉層	15.4	5.8	底部 底 外置 斗斗斗、高台ハケ斗、 蓋部ニ糸切痕跡 内面 斗斗斗	密	良	灰白色	口縁部 1/2	皮輪つけがけ、 繪花ハケ所 内面磨耗 (履として使用例)
12	008-01	陶器 山茶桶	E区	包倉層	—	—	底部 底 外置 斗斗斗、高台ハケ斗、 蓋部ニ糸切痕跡 内面 斗斗斗	1~2mm 砂粒	良	灰白色	底部 1/4	

4. まとめ

試掘坑及び本調査区の地山の土質に視点をあてると、礫混黄褐色粘質土の地点（本調査A区西側、試掘坑2・3・4・15・16・18・19・20・21・22・23）と、礫混黄褐色砂の地点（本調査A区東側、B～H区、試掘坑1・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・17）にわけることができる。

これを、遺構の検出状況と併せてみると、礫混黄褐色粘質土の地点からは遺構が検出されているのに対し、礫混黄褐色砂の地点からは遺構はほとんど検出されていない。

また、現況の地形を観察しても、試掘坑9から12にかけて旧河道の痕跡らしい畦畔を認めることがで

- [註]
- ①新田剛『上箕田遺跡』（鈴鹿市教育委員会 1993年）
 - ②鈴鹿市教育委員会「扇広遺跡」（『鈴鹿市文化財だより』9 1990年）
 - ③鈴鹿市教育委員会「中尾山遺跡」（『鈴鹿市文化財だより』8 1990年）
 - ④岡田登「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸」（『考古学雑誌』第75巻第4号 1990年）
 - ⑤三重県教育委員会『三重県文化財年報』19 1989年
 - ⑥三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』2 1991年
 - ⑦『鈴鹿市遺跡地図』（鈴鹿市教育委員会 1984年）
 - ⑧和田年弥「古墳文化の地域的構造とその特質—伊勢国鈴鹿地方の場合—」（『古代学研究』第72号 1974年）
 - ⑨三重県教育委員会『井田川茶臼山古墳』1988年

きる。

さらに、A区では地山が北西から南東にかけて傾斜することが確認された。

以上のことから、発掘調査を行った地点は、段丘上の集落から段丘下の旧河道あるいは沼沢地に至る部分で、下代遺跡の縁辺部にあたると思われる。

また、遺物のほとんどは旧河道の堆積土と思われる礫混黄褐色砂上の黒褐色土内から出土している。これらの遺物は集落にともなうものではなく、集落内から旧河道・沼沢地に流れ込んだものであろう。

（田中伸之、竹田憲治）

- ⑩三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』6 1994年
- ⑪大場範久「北野古墳」（『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市遺跡調査会 1978年）
- ⑫前掲⑦に同じ
- ⑬前掲⑥に同じ
- ⑭三重県教育委員会『三重県文化財年報』11 1981年
- ⑮前掲⑥に同じ
- ⑯三重県教育委員会『三重県文化財年報』9 1979年
- ⑰前掲⑥に同じ
- ⑱弥永貞三、谷岡武雄『伊勢湾岸の古代集里制』（東京堂出版 1979年）

IV. 鈴鹿市小田町 天水遺跡

天水遺跡(1)は鈴鹿市小田町に所在し、鈴鹿川・安楽川と椋川の合流点付近の河岸段丘上に立地する。

付近には、昭和47年に発掘調査が行われ、鏡や冠などが出土した井田川茶臼山古墳^①(2)の他、全長40mの前方後円墳であった城山古墳(3)、茶臼山2号墳(4)・谷山古墳(5)・川合古墳(6)・天寛山古墳(7)・宮上道古墳(8)などの古墳がある。また、奈良時代の布目瓦が出土した茶臼山寺院跡(9)、古代～中世の遺物が散布するハツ八遺跡(10)・里沢遺跡(11)・阿らこ遺跡(12)・宮上道遺跡(13)などの多くの遺跡がある²。

また、隣接する和泉町には、中世の城館である和泉城があったとされているが所在地は不明である^③。さらに、北側の丘陵上には近世の東海道が通っている。

当遺跡では、以前から古墳時代～鎌倉時代の土師器・山茶碗が表面採取されていた。昭和62年度には、県道平野亀山線道路改良事業にともなって、試掘調査が行われている^④。

当遺跡の南の水田が、県営ほ場整備事業の対象となったため、平成6年3月に試掘調査を行った。その結果、土坑が検出され、縄文土器、土師器、須恵器、陶器が出土し、遺跡範囲が従来よりも南にも広がることがわかった。そこで、ほ場整備により削平を受ける排水溝部分約400m²について調査を行った。

調査区の基本的な層序は、第1層：暗灰色土(耕作土)、第2層：灰褐色砂質土、第3層：青灰色砂質土(遺物包含層)、第4層：黄灰色粘土(地山)であ

り、地山までの深さは約140cmである。

調査の結果、遺物は検出されなかったが、包含層内から、土師器、須恵器、陶器山茶碗・天目茶碗、青磁碗、瓦などが出土した。

土師器長胴甕(1)は、胎土に2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は浅黄褐色である。土師器杯(2)は、胎土に密なものをを用い、焼成は良好で、色調は鈍い褐色である。陶器山茶碗(3・4)はいずれも胎土に1mm以下の微砂粒を含み、焼成は良好で色調は灰白色である。藤澤良祐氏の編年^⑤による第6型式に相当する。

今回の調査区は、従来の遺跡範囲から標高が1m程低いこと、調査中にもかなりの湧水がみられたこと、出土した土器のほとんどが磨耗を受けていたことから、集落内とは考えられず、集落に隣接した湿地であり、遺物は集落からの流れ込みであったと考えられる。

(竹田憲治)

(註)

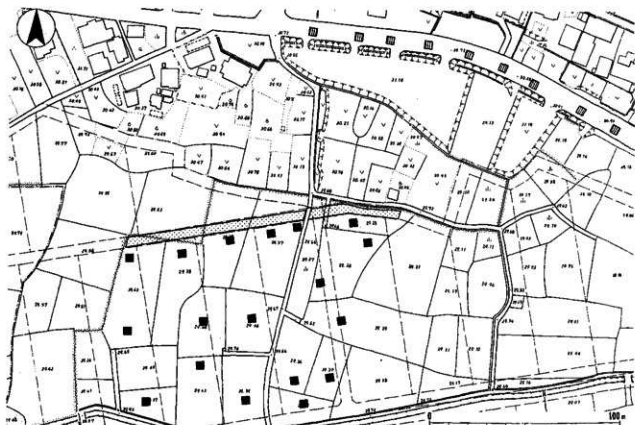
- ① 小玉道明・吉水康夫『井田川茶臼山古墳』(三重県教育委員会、1988年)
- ② 周知の遺跡については、『三重県鈴鹿市遺跡地図』(鈴鹿市教育委員会、1987年)及び、『亀山市埋蔵文化財分布地図』(亀山市教育委員会、1993年)による。
- ③ 『三重の中世城館』(三重県教育委員会、1976年)
- ④ 『三重県埋蔵文化財年報』18(三重県教育委員会、1988年)
- ⑤ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター、1984年)



第1図 遺跡位置図(1:25,000)(国土地理院「亀山」「鈴鹿」から)

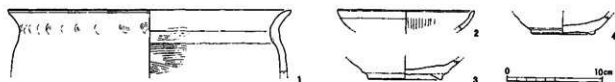


第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

■ 昭和63年度試掘調査 □ 平成6年度試掘調査
 □ 平成6年度発掘調査



第4図 出土遺物実測図 (1 : 4)

V 大洞遺跡 風呂ノ谷遺跡 細野遺跡

1 はじめに

美里村大字北長野の細野地区は、雲出川の支流である長野川上流右岸に位置する。大洞遺跡、風呂ノ谷遺跡、細野遺跡は、東西を山に挟まれた幅 200m 程の南向きの谷筋にある。三遺跡とも平成 5 年度に

その一部が発掘調査されており、今回はその継続的な調査である。調査期間は平成 6 年 5 月 12 日から 6 月 30 日までである。

2 大洞遺跡

前年度は A・B 地区を調査しており、今年度は C 地区 560 m² の発掘調査を実施した。遺構は土坑、小穴を検出したのみである。遺物は、包含層から中近

世の土師器、陶器等の小片が出土した。図示し得た物は土師器の鍋 (1・2)、陶器山茶碗 (3)、天目茶碗 (4)、青磁碗 (5) の 5 点である。

3 風呂ノ谷遺跡

前年度は A 地区の東半を調査したが、今年度は A 地区の西半と B・C 地区の合計 580 m² の発掘調査を実施した。遺構は土坑、小穴を検出した。遺物は、中近世の遺物が少量出土した。陶器の香炉 (6) は、

A 地区の遺物包含層から出土した。三足になるもので、体部には丸ノミ彫りによる半菊文がみられ、外面には灰釉が施されている。18 世紀の本業焼であろう。

4 細野遺跡

前年度は A 地区の調査をしており、今年度は B 地区 850 m² の発掘調査を実施した。

(1) 遺構

遺構は溝、土坑、中世墓、小穴を検出した。

①溝 (SD10)

溝 SD10 は調査区中央で検出したもので、長さ 7 m、幅 0.8m、深さ 0.1~0.3m である。

②土坑 (SK1~7)

土坑は SK4・7 のように 5m を越す大型のものと、SK1~3・5・6 のように径 2m 未満のものがある。なお、SK9・11 は後世の攪乱である。

③中世墓 (SX8)

中世墓 SX8 は、平面形は 1.0×0.8m の隅丸方形で、深さは 10~15 cm である。被火した人頭大の石を両側に 3 個ずつ配し、中央部には 50×10 cm の炭化物が残る。

(2) 遺物

土坑、小穴、遺物包含層から土師器皿・鍋・羽釜、瓦器皿、陶器碗・皿・指鉢、鉄製品などが出土した。

①土師器

小皿 (7~9) 口径 9cm 前後の小皿である。(9) は内面の口縁端部 3ヶ所に油煙痕が残る。

皿 (10~12) 口径 11 cm 前後の皿である。(12) は SK1 出土である。

鍋 (13・14) (13) は SK4 出土、(14) は SK2 出土である。ともに煤が付着する。



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

(国土地理院・津西部・1:50,000)

1 大洞遺跡 2 風呂ノ谷遺跡 3 細野遺跡 4 長野氏城跡 5 西の城 6 中の城 7 東の城

羽釜 (15・16) 2点とも鈿部から口縁部にかけての小片である。(16)はSK7出土である。(15)には焼成前に外面から穿った径0.7cmの穿孔がみられる。両者とも鈿から下には煤が付着する。

②瓦器

小皿 (17) 内面にはジグザグの暗文がみられる。

③陶器

山茶碗 (18~20) (19)は藤澤編年の5型式すなわち12世紀後葉~末葉、(18・20)は6型式すなわち13世紀前葉のものである。

丸碗 (21) 外面は蓮弁風である。時期は16世紀初頭であろう。

平碗 (22) 高台は削り出である。外面体部と内面には灰釉を施す。高台部には糸切り痕が、また内面にはトチン痕が残る。

天目茶碗 (23) 高台は削り出で、外面体部と内面には、にぶい暗黄褐色の鉄釉を施す。15世紀末~16世紀初頭かと思われる。

端反皿 (24) 外面底部から体部下半はロクロケズリ、体部上半から口縁部はロクロナデである。内面全面と外面の体部上半から口縁部は灰釉を施す。15世紀末~16世紀前半であろう

摺鉢 (25) SK3出土で、摺目は5本を1単位とする。

④鉄製品

鉄鏝 (26) 残存長6.3cm、幅3.0cmである。

釘 (27) 長さ16.5cm、断面は1.5×0.8cmの長方形である。

(3)まとめ

土坑、小穴、遺物包含層から主として12世紀中頃~16世紀前半までの遺物が出土していることから、土坑や中世墓などの遺構も概ねこの時期のものと考えてよいであろう。建物は検出されなかったが、中世の集落跡の周辺部と考えられる。

〔註〕

①高崎仁「安芸郡美里村 大洞遺跡 風呂ノ谷遺跡 細野遺跡」『六地藏A遺跡・六地藏B遺跡・高塚宅跡・東川遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994

②藤澤良祐「本業焼きの研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館 1989

③a. 藤澤良祐「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館 1982

b. 藤澤良祐ほか「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅱ 瀬戸市歴史民俗資料館 1983

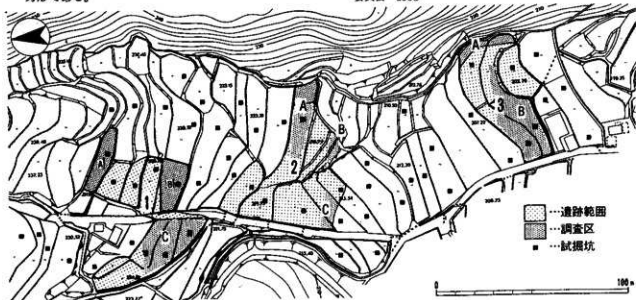
④以下の陶器類の美年代については、下記の文献を参考にした。

a. 井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985

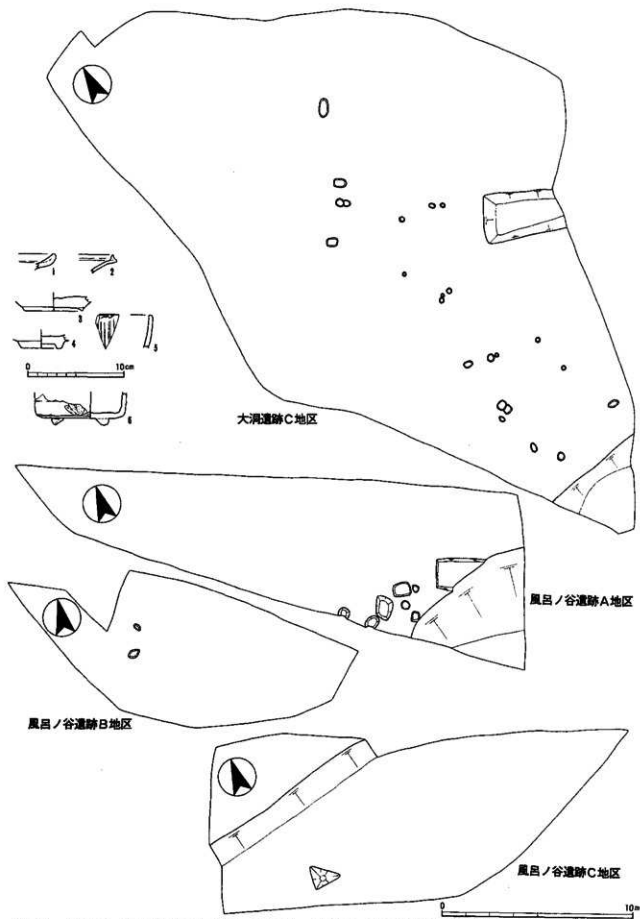
b. 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅴ 瀬戸市歴史民俗資料館 1986

c. 藤澤良祐「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991

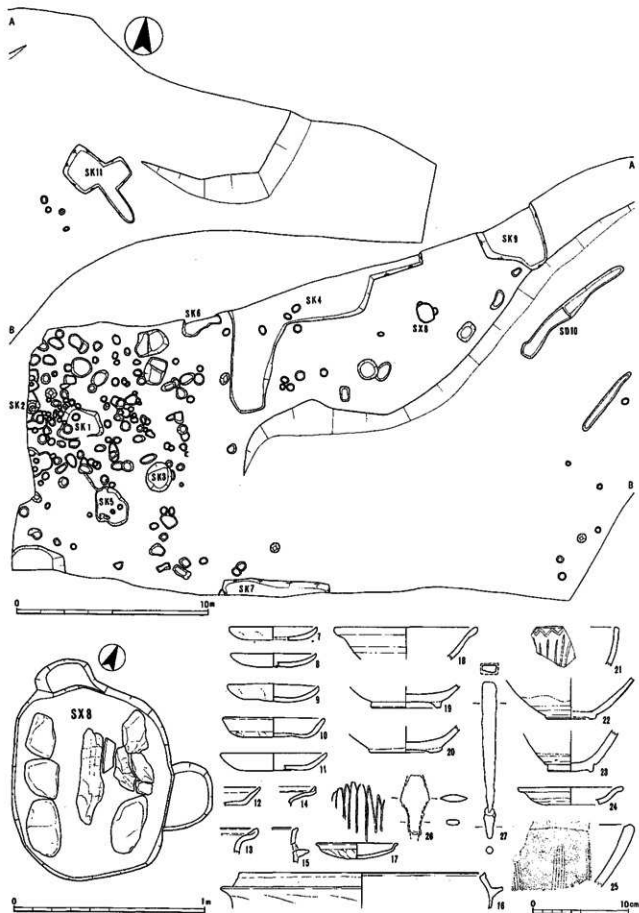
d. 藤澤良祐「瀬戸市史」陶磁史篇 四 瀬戸市史編纂委員会 1993



第2図 遺跡地形図(1:2,000) 1 大洞遺跡 2 風呂ノ谷遺跡 3 細野遺跡



第3図 大洞遺跡・風呂ノ谷遺跡平面図(1:200)、大洞遺跡・風呂ノ谷遺跡遺物実測図(1:4)



第4図 細野遺跡平面図(1:200)、中世基SX8実測図(1:20)、細野遺跡遺物実測図(1:4)

Ⅵ. 釜生田遺跡

1. 位置と歴史的環境

歴史的環境

中勢地域を代表する河川である雲出川の支流、中村川は、高須ノ峰に端を発し、嬉野町井之上で伊勢平野の穀倉地帯へ流れ出る。この中村川は、山間部の谷筋を流れる間、蛇行を繰り返して、結果として河岸段丘と沖積低地を形成した。このうち沖積低地は、谷筋という制約もあって決して広くはないが、これら沖積低地や河岸段丘上には縄文時代以来、多くの遺跡が形成されることとなった。

このうち、縄文時代の遺跡には、代表的なものとして上流から下沖跡(3)、東野B遺跡(5)、天白遺跡(6)、弥五郎垣内遺跡(7)、前期の縄点遺跡と目され井之上遺跡(8)があり、さらに中村川へ流れ込む古田川に沿う遺跡として釜生田遺跡(1)と平成元年に調査が行われた井之広遺跡(2)がある。これら遺跡は、多くが早期と中後期に時期的な主体を置き、谷筋を転々と移動しながら集落形成を行った様子が窺える。

一方、平野側の沖積部でも縄文時代の遺跡は認められ、代表的なものとして、当地としては比較的珍しい中期中葉の土器が多数出土した針箱遺跡(10)や中後期の堀之内遺跡(14)などを挙げる事ができる。

弥生時代になると、遺跡形成の中心は谷筋から平野側へ移るが、それでも蛇行する中村川の流路防側面側の小さな沖積低地を利用した中期集落の存在がいくつか知られている。

古墳時代になると、嬉野町域は天花寺丘陵を中心とし、前期の前方後方墳をはじめとして、多数の有力古墳が多数営まれる地域として伊勢でも特異な地位を占める。中村川流域の狭隘部でも、前中期古墳こそ見られないものの、後期の群集墳は活発に形成される。特に、釜生田古墳群として把握される古墳時代後期の群集墳は、短い狭道と幅広の玄室、持ち送りの強い天井によって特徴づけられる個性の強い横

穴式石室を内部主体とし、極めて注目されている。

古代に入ると、本地域は天花寺廃寺や上野廃寺など伊勢でも古代寺院の建立密度の濃い地域として注目される。そして、中村川流域の狭隘部では、中村川に迫る丘陵を利用して、辻垣内瓦窯跡群が営まれた。この瓦窯からは、日本最大の鴫尾が出土し、供給予定先は不明ながら、本地域における寺院群の格式の一端を示すものとなった。

このように、中村川流域地域は縄文時代以来、多数の遺跡が営まれ、井之広遺跡を包含する谷筋の狭隘部においても古来より特徴ある遺跡や古墳が時代を超えて多数営まれたことは注目に値しよう。

遺跡立地と経緯

釜生田遺跡は、中村川に面する弥五郎垣内遺跡の西部に県道を挟んで隣接し、遺跡名が異なるが弥五郎垣内遺跡と一体の遺跡と考えることができる。また、弥五郎垣内遺跡の南側には天白遺跡が立地し、中村川が蛇行しながら川に三方が囲まれた台地上には古くからの遺跡が多数立地している。

釜生田遺跡の東北部にほ場整備が計画され、平成5年度に試掘調査を2回実施した。ほ場整備の計画地域は、中村川の支流である古田川に三方を囲まれており、試掘調査の結果、事業対象地のうち西半部の4,200㎡が遺跡範囲であることが明らかとなり、平成6年に2,500㎡の発掘調査を実施した。

調査地は、標高23~25m程度の低い台地上に立地する。この台地は、西・南・東の三方を小河川である古田川に囲まれ、北側はそのまま丘陵部へとつながる。つまり、釜生田遺跡は、北側丘陵から続く台地上に立地し、開けた南側に小河川を臨んでいる。

なお、古田川は、この台地を長方形に回り込むように東側へ流れて、中村川に合流する。釜生田遺跡から中村川までは、直線距離で200m程である。



- | | | | |
|-----------|-------------|------------|----------|
| 1 釜生田遺跡 | 9 上野垣内遺跡 | 17 雄野遺跡 | 25 新田遺跡 |
| 2 井之広遺跡 | 10 島田遺跡 | 18 下之庄東方遺跡 | 26 敷ノ下遺跡 |
| 3 下沖遺跡 | 11 蛇亀橋遺跡 | 19 針箱遺跡 | 27 鳥戸遺跡 |
| 4 大垣内遺跡 | 12 焼野遺跡 | 20 片野遺跡 | 28 伊勢寺遺跡 |
| 5 東野B遺跡 | 13 天保遺跡 | 21 馬ノ瀬遺跡 | 29 堂ノ後遺跡 |
| 6 天白遺跡 | 14 堀之内遺跡 | 22 清水谷遺跡 | |
| 7 弥五郎垣内遺跡 | 15 中尾垣内遺跡 | 23 野田遺跡 | |
| 8 井之上遺跡 | 16 上野鹿寺(下層) | 24 庵ノ門遺跡 | |

第1図 遺跡位置図(1:50,000・縄文遺物確認遺跡で構成)【国土地理院1:25,000「大仰」「大河内」より】

2. 遺構と遺物

当初は立地的な条件から、縄文時代の遺構が多く検出されると期待したが、検出した遺構は中世を中心とするもので、遺構密度も比較的薄く、出土した遺物もコンテナで28箱と調査面積に比較して少ない。

遺構検出面は、西側では表土0.2m・赤褐色砂礫0.2m下の明黄褐色土(地山)で、標高は海拔27mある。遺構検出面は東側に向かって傾斜しているが、東端では、西端と比較して遺構検出面が1.8m(海拔25.2m)深くなっている。なお、調査区の中央付近は自然流路があるため、遺構検出面は表土から深さ1.0m(海拔25.4m)と深くなっている。

土坑 後述するSX7を含めて、土坑として調査時に認識したものは15基あるが、大半の土坑からは遺物がなく、現代の擾乱である可能性が高い。

SX7 調査区中央のSD10とSD8の間にあり、人頭大の礫が1m×0.6mほどの範囲に集中して検出された。礫は中央に0.3mと大きなものが2石あ

り、その周囲を人頭大の礫が置かれていた。礫に混じり土師器皿(9)・鍋(10・11)・羽釜(12)などが出土しており、これらの遺物は15世紀前半に比定できる。中世墓の可能性が高い。

溝 9条検出したが、幅0.4mほどの小溝は現代のものと思われる。調査区東側では東西溝2条を確認し、埋土から山茶碗などを出土している。調査区西側で確認した蛇行しながら流れる2条の溝は自然流路の可能性が高い。

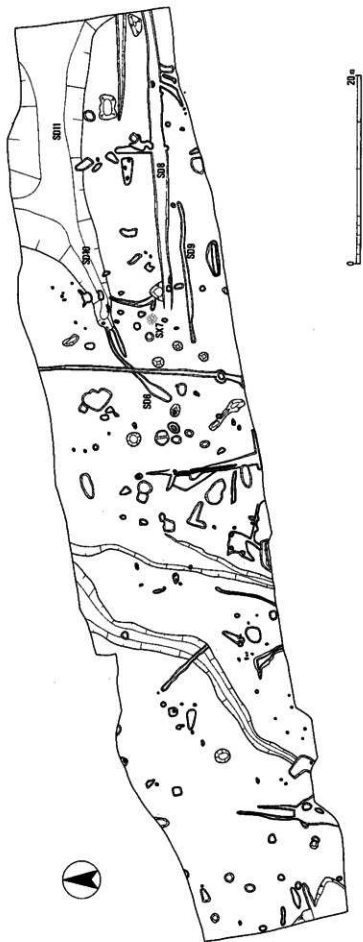
SD8 調査区東部の南側に位置する幅1.4m、深さ0.1mの東西溝である。調査区東外側に延び、延長35mにわたり確認した。出土した遺物には、土師器皿(15)・鍋(16・17)などがあり、15世紀後半の遺構と考えられる。

SD9 SD8の南にある幅0.6m、深さ0.05mの東西溝で、15世紀後半の土師器鍋(14)、陶器碗(13)が出土している。



第2図 調査区位置図(1:2,000)

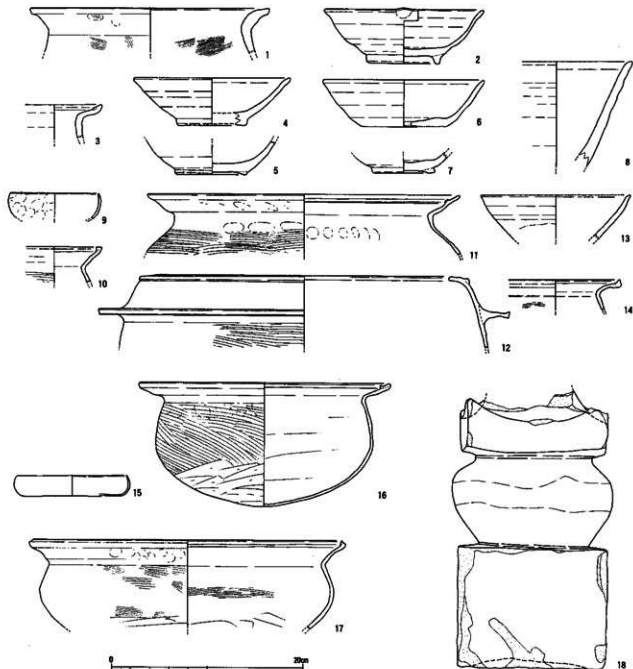
遺跡範囲 調査範囲



第3図 遺構平面図 (1:400)

SD11 調査区東側の北部に位置する。北肩が調査区の外に延びるため、幅は不明であるが7m以上ある。深さ0.6mで、調査区東側に延び、延長35mにわたり確認した。溝底が西側で北側に延びる様相を呈しているため、北側に折れ曲がるものと思われる。なお、西側先端についてはSD10として遺物を取り上げているほか、西側の外側には幅0.4mほどの細長い溝SD6が延び、方向から見て同一の溝と

考えられる。SD11から出土した遺物には、土師器鍋(3)・羽釜、山茶碗(4~8)などがある。遺物から見て13世紀代の遺構である。また、SD6からは山茶碗(2)が出土しているほか、SD10の土師器甕(1)は古代の土師器甕の形態を残しており混入の可能性が高い。その他 表土から一石五輪(18)が出土した。16世紀後半代の遺物と考えられる。



第4図 出土遺物(1:4) 1:SD10. 2:SD6. 3~8:SD11. 9~12: SX7
13~14:SD9. 15~17:SD8. 表土:18

Ⅶ 松葉遺跡

1 はじめに

(1) 位置と周辺の遺跡

松葉遺跡(1)は柳田川中流右岸の段丘上に位置し、現況は水田及び畑地で、西から東にかけて緩やかに下がる斜面になっている。

松葉遺跡の所在する勢和村波多瀬地区には、縄文時代の波多野遺跡(2)、弥生時代の波多瀬橋遺跡(3)、あるいは松葉遺跡のすぐ西側の中山とよばれる丘陵上の中世城館である波多瀬城(4)が存在する。一方、東方の片野地区や上出江地区には多数の

縄文～弥生時代にかけての遺跡が散在しており、とりわけ新神馬場遺跡(5)は発掘調査によって縄文時代の土器、石器が出土したことで有名である。

(2) 試掘調査

松葉遺跡の試掘調査は平成6年3月7～11日に、2×4mの試掘坑を34ヶ所設定した。試掘調査では、No28から土師器甕(1)が、No24から土師器鍋(2)が、No15から陶器山皿(3)が、No27から陶器皿(4)がそれぞれ出土している。

2 本調査

(1) 調査経過

本調査は工事により削平を受ける部分と排水路部分について、A～Dの4地区に分けて調査を行った。調査面積は、A地区180㎡、B地区210㎡、C地区170㎡、D地区640㎡、合計1,200㎡で、調査期間は平成6年7月18日から8月29日までである。

(2) A地区

調査区の土層は南壁で実測をした。基本的層序は、第1層：耕作土、第2層：小礫混じり灰色土、第3層：黄褐色ブロック混じり黒褐色砂質土である。遺構検出は第3層の下面で行なった。

遺構は溝、土坑、小穴を検出した。遺物が少なく、個別の遺構の時期特定は難しいが、その多くは中世の可能性が高い。

溝SD1 幅1.2～1.7m、深さ0.5mで、長さは6mまで確認したが、両端とも調査区外に延びるため、不明である。埋土は第1層は暗褐色土、第2層は黒色土と灰黄色粘土の混じり土である。埋土から山茶碗の破片が出土していることから、中世の溝と考えられる。

A地区からの出土遺物としては、遺物包含層から出土した縄文土器(5)がある。

(3) B地区

調査区の土層は調査区南壁で実測をした。基本的

層序は、第1A層：耕作土、第1B層：耕作土、第2層：明黒灰色土、第3層：黒灰色土混じり黄灰色土、第4層：明黄灰色土である。遺構検出は第4層上面で行なった。

遺構は土坑、小穴を検出した。時期はA地区同様中世であろう。

遺物は小片のため図示し得なかった。

(4) C地区

調査区の土層は北壁で実測をした。

遺構は溝、土坑、小穴を検出した。

土坑SK1 平面形は長径0.9m、短径0.7mの楕円形で、深さは、25cm程である。弥生時代中期後半の大形の壺(17・18)2点が出土した。

(17)は、体部下半と首部の破片である。下半はミガキ、上半はハケメ、内面はハケメである。

(18)は、体部のみで、口頸部は欠損している。胴部下半はケズリ、頸部に刺突、内面はハケメである。

その他の出土遺物としては、包含層及び小穴から出土した縄文土器の小片(6～15)や陶器山皿(16)がある。

(5) D地区

調査区の土層は南壁で実測をした。

基本的層序は、第1層：耕作土、第2層：礫混じり暗褐色土、第3層：黄褐色砂礫、第4層：礫混じり

り黄褐色土、第5層：暗灰褐色土、第6層：灰褐色砂礫、第7層：礫混じり淡褐色土、第8層：小礫混じり暗褐色土である。遺構検出は第8層の上面で行なった。

遺構は土坑、小穴を検出した。

出土遺物には陶器（19・20）がある。

〔注〕

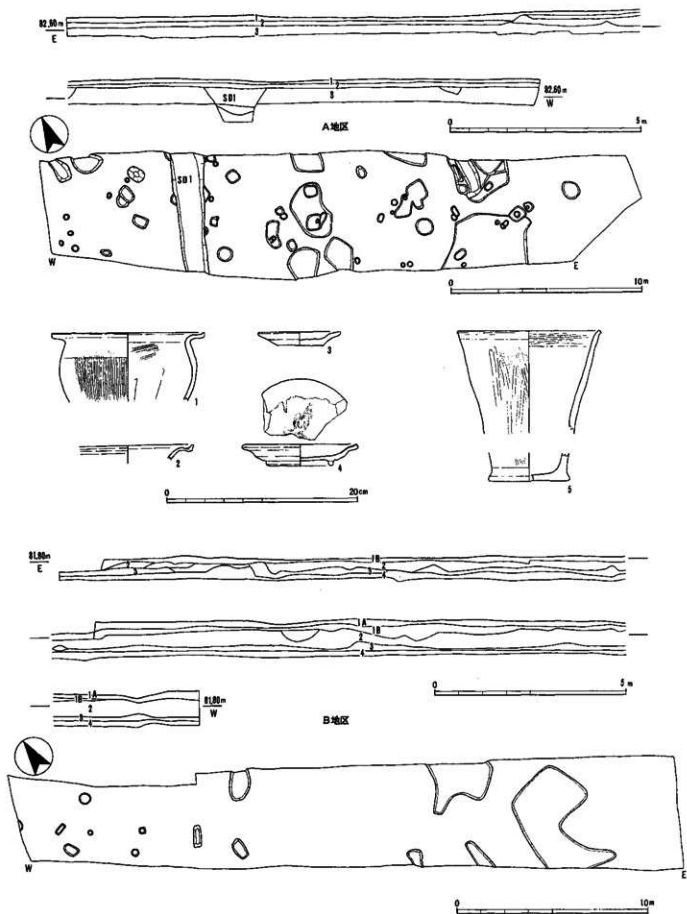
①『新神馬場遺跡発掘調査報告書』三重県立津高等学校地歴部 1972



第1図 遺跡位置図（1：50，000）

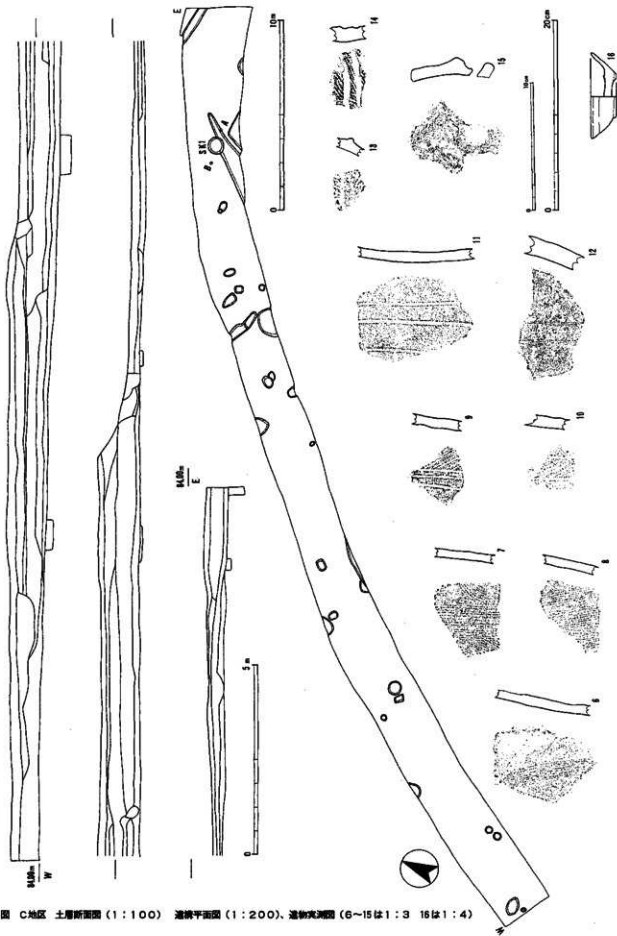


第2図 調査区位置図（1：2，000）

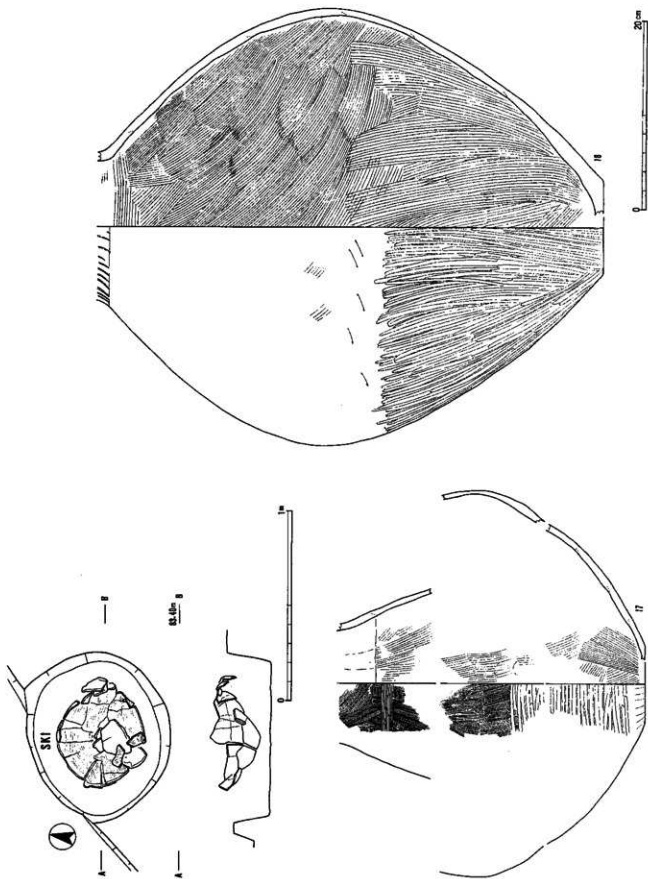


第3图 A地区 土层断面图(1:100)、透視平面图(1:200)、試掘調査及びA地区遺物実測図(1:4)

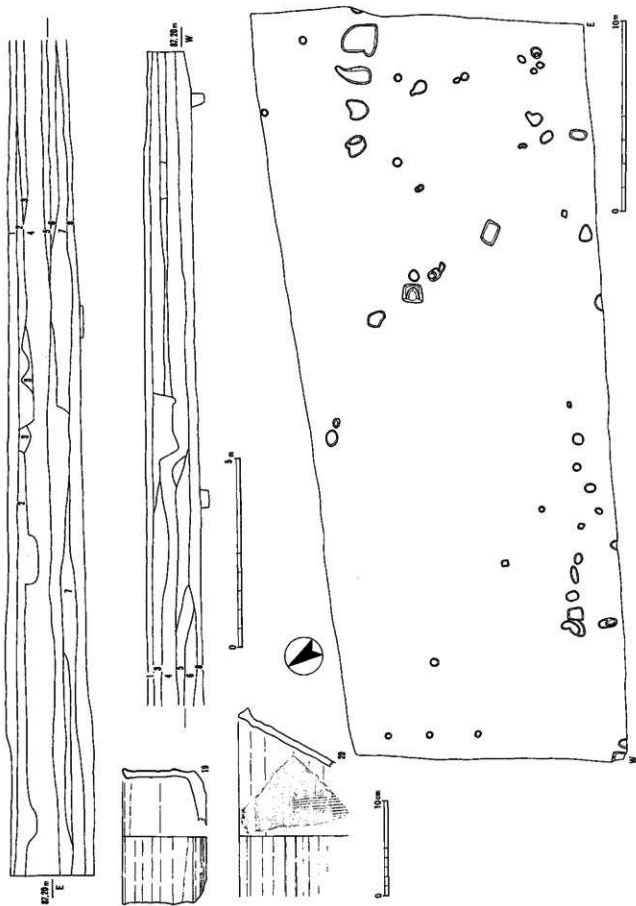
B地区 土层断面图(1:100)、透視平面图(1:200)



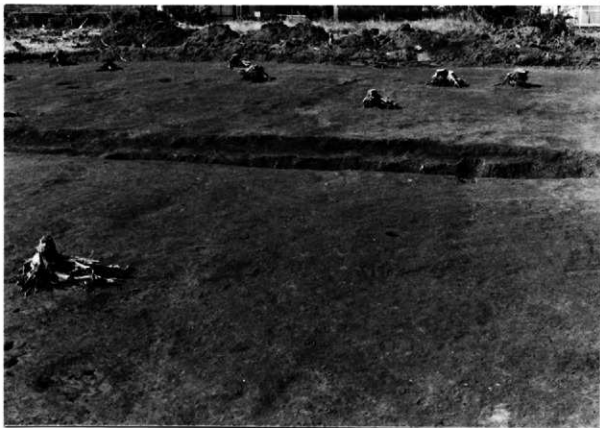
第4图 C地区 土层断面图(1:100) 遗址平面图(1:200)、器物实测图(6~15是1:3 16是1:4)



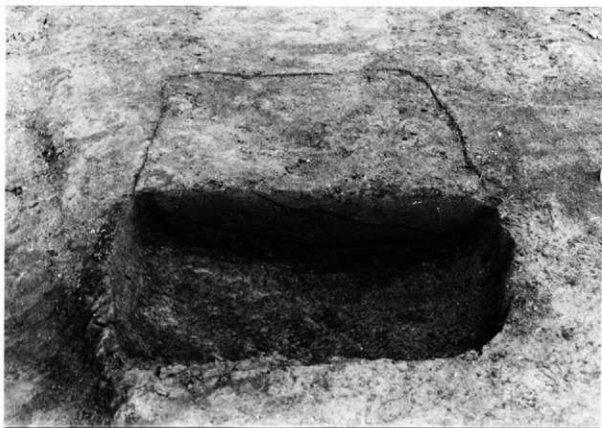
第5图 SK1 遗物出土状况图 (1:20)、遗物实测图 (1:4)



第6图 D地区 土層断面图(1:100)、遺跡平面图(1:200)、遺物実測图(1:4)



調査区全景（東から）



SK2断面（南から）



大洞遺跡C地区（東から）



風呂ノ谷遺跡A地区（東から）

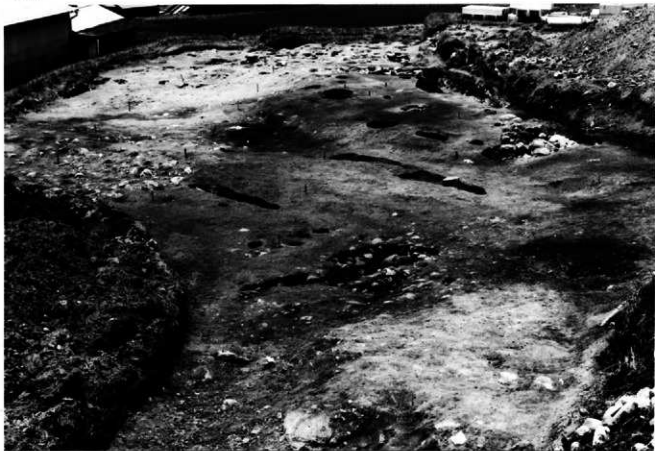


風呂ノ谷遺跡B地区（西から）



風呂ノ谷遺跡C地区（北から）

PL4



細野遺跡B地区（北東から）



細野遺跡SX8（南から）



調査区全景（東から）



調査区中央部（南東から）



調査区東半分（南西から）



自然流路付近（南から）



松葉遺跡遠景（北から）



A地区（東から）



B地区 (西から)



C地区 (南から)



C地区 SK1 (西から)



D地区 (北から)

平成7(1995)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 125-1

平成6年度県営農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年3月発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
